

『演劇禍』 天乃こども

〔主要な登場人物〕

田中 遥（たなか・はるか）― 劇作家・演出家

黒岩 由紀夫（くろいわ・ゆきお）― 工学者

仏願 愛（ぶつがん・まな）― 俳優

扇田 恵理（せんだ・えり）― 演劇ライター

〔注〕

□で囲まれた部分は映像で表現されることを想定している。

あらずじ

主人公・田中遥は観客席にいて、舞台には家族の演劇が映し出されている。その家族は、仮想空間に意識だけを残して亡くなっている。仮想空間でずっと演劇をしているため、家族は演劇そのものである。ちようど、家族の役割を入れ替えたような家族の演劇をしていた。それを観た遥は、家族とは何かを考え、それは同時に演劇とは何かということを考えるものでもあった。もしかすると、家族が仮想の世界にいるのではなく、自分たちのいる世界こそが、家族の演劇が生み出したものなのではないか、と考える。遥は、観客であることを辞め、世界に演劇を広めていく、その演者となることを決意する。

遥は、高校で優秀な人物を集める。成績がいい黒岩由紀夫、演技が上手い仏顔愛、演劇が大好きな扇田恵理の三人だ。由紀夫には次世代の演劇のプラットフォームを作っていくための技術開発を任せ、愛には俳優のスターとなりVR世界で自由に使える俳優ソフトの素材となってもらい、恵理には演劇ライターとなり演劇を広めてもらうことをお願いする。最終目的は、全人類に遥の家族の演劇を見せることである。

高校卒業後、遥は大学で劇作・演出を、恵理はアートマネジメントを専攻する。由紀夫は工学部へ入り、愛は高校時代から頭角を現し、国営のミュージカルにまで出演する。いつしか、世界では仮想世界で演劇を作ることが当然となっていた。遥と愛は、由紀夫の研究室へ向かう。そこでバーチャル俳優ソフトVACTOR（ブイアクター）の制作にとりかかる。愛はVACTOR第一号MANAとなり、その想いを恵理が取材する。

演劇を観るといふ行為は世界中で流行を見せていったが、作り手が爆発的に増えるわけではなかった。みんなが演劇を作るといふことを身近なものにしていくため、育成ゲームの開発が浮上する。主人公は演劇に触れ、独自に演劇を創っていく。このゲームでは、古今東西のあらゆる演劇のアーカイブを集め、その使用料を著作者へ還元していくことで、どんどん演劇にお金を回していく。また、PLAY TO EARNを目指し、ゲームのプレイヤーは独自通貨を稼ぐことが出来るようになる。「演劇を楽しみ、演劇を支援し、演劇を創る」をコンセプトとし、「演劇で稼ぐ」を一般的なものにしていく。

こういった演劇作りの普及ののち、戯曲執筆支援ソフトを配布する。人びとにあまり馴染みのない「戯曲を書く」といふ行為のハードルを下げていく。そのソフトで使われる言語クラウドは、成長し、フィードバックを重ねるなかで、人びとの言語を支配していく。

世界は演劇という名のなにかに満たされていく。そんななか、遥の当初の目的であった、全人類に自分の家族の演劇を見せるということに、恵理が反対する。ブラックボックスを開けることのリスクを指摘する。由紀夫は演劇論と哲学が結びつき世界に体现されることへの好奇心を告げ、愛は自分が世界の歯車になっていくことの喜びを語り、遥は家族の演劇には観客がいいため報われて欲しいと言う。恵理は止めることが出来ず、降りる。

家族の演劇を全人類が観る。食卓には何もなく、家族が食べている者は何かと、人々は想像する。その想像は全て現実となり、世界もが食べられていく。これは無限に繰り返され、観客である人々の思考を埋め尽くしていく。

エピローグ オーディエンス・マシーン

劇場にいる。

観客席には、観客が座っている。あなたもそのうちの一人である。

開演時刻になると、大きなブザー音が鳴る。

客電がゆつくりと余韻を残して消える。

しばらく暗闇の時間が続く。

舞台に演劇が映し出される。

舞台下手に勉強机が二つあり、子ども部屋をあらわしている。母が机の上にプリント広げているが、その上でゲームをしている。父は読書をしている。舞台中央に食卓がある。舞台上手にはキッチンがあり、兄がエプロンをして料理を作っている。キッチンの方から姉が子ども部屋へ向かう。

姉 おい、宿題はやったのか。

母 うるせー、今からやるっての。

父 お兄ちゃんはいつもそう。どうせやらないでしょ。

母 今からやるって言うてるだろ。

兄 もうすぐ飯できるわよ。

母 おっ、じゃあ後かな。

父 いまいく。お兄ちゃんまたそうやって後回しにする。

母 ちっ、うぜー。

姉と父は食卓へ向かう。兄は皿を食卓に並べ、父がそれを手伝う。姉はテレビをつける。母は少しゲームを触ってから、イライラした様子で食卓へ向かう。四人の家族が食卓にそろう。

四人 いただきます。

消える。観客席にいた田中遥がゴーグルを外し、ゆつくりと立ち上がる。

遥 私は観客だった。

遙 これは、私の家族の演劇です。うーん。なんだろう。私にも正直よく分からない
んですよね。私の家族が演じている、家族の演劇、っていうことなんだと思いま
す。

遙は観客席の通路をうろろうする。

遙 なんか、変、でしたよね。大人が勉強してて、子どもが料理を作ってて、みたい
な。兄が母役を演じる、ということが、近代的な家族観を問い直しているとい
うことなのかもしれません。

舞台に向かって手をかざす。

遙 ……でも、どこからどこまでが演劇で、どこからどこまでが家族の日常会話なの
か、分からないんです。だって私の家族は、この、仮想空間の中にしかないか
ら。私を現実世界に残して、向こうですーっと演劇をしているから。

もうすぐご飯できるわよ。

遙 声 リビングから声が聞こえる。炊事ロボットの声。本当にそう言ったのか、それと
も、幻聴なのか。自室の扉を開ける。つめたい廊下を歩き、リビングへ向かう。
カチャカチャと音が聞こえる。そこに誰かがいるような気がする。さつき見た演
劇のせい。想像してしまう。そこに居る、家族の声を。

遙は空いている指定の席に座る。舞台に演劇が映る。

舞台下手にはキッチンがあり、手前には冷蔵庫、その奥に食器棚がある。食器棚と
対面するように流し台、コンロがある。コンロは二口で、ちょうど手前のコンロで
鍋がぐつぐつとしている。舞台中央奥にテレビがある。舞台上手に食卓があり、さ
らにその上手には庭に続く大きな窓がある。

父 またオンラインゲームで遊んでいたのか。

兄 オンラインゲームって言わないよ今は。

父 なんだ、その、ブイなんとか。

姉 あはは、言えてない。

母 ほら、いただきますよ。

遙 うん。

五人 いただきます。

五人はシチューとパンを口に運ぶ。少しの沈黙のあと、父がテレビをつける。観客
席が映る。その中に一人、遙がいる。遙は現実の観客席の方へ振り返る。すると、
家族の姿が消える。

観客席の遙は、演劇の遙と目があう。

遙　ねえ、これってなに。

遙　なになんて。

遙　なんで私がそこにいるのって。

遙　なんで私がそこにいるのって。私もそう思う。

遙　いや、そうじゃなくて、どういう状態。

遙　そっちは演劇で、こっちは観客。……ってことなんじゃないかな。

遙　……そっか。演劇って、面白いのかな。

遙　別に面白くないよ。少なくとも、いま、これは。

遙　そうじゃなくて、うちの家族は、私を残して演劇と心中したわけじゃん。向こうでずっと演劇をしてるわけじゃん。そんなに大事なもののかな。私を一人この世界に残してまで、ずっとやっていたかったことなのかな。

遙　聞けないんだから、分からないよ。

遙　生まれたときから、ずっと家族が演劇で、演劇が家族だから。ずっと、ずっと演劇のこと考えてるの。だってこれ、おかしいじゃん。なんで私がここにもそこにもいるの。

遙　只今より、永遠に私を上演します。ぶー。

遙　目が覚めたとき、顔を洗っているとき、歯磨きをしているとき、太陽の日差しを浴びたとき、三毛猫にすれ違ったとき、小学生の自分を思い出したとき、わざわざ茶漬を食べたとき、国語の授業を受けているとき、強い風が吹いたとき、あるときふと、いまこの全てが演劇に思えてくる。これはいつたいなんなのだろう。もしかしたら、実は、私たちの日常生活こそが演劇で、仮想空間にいる家族こそが観客で、みたいなことだったりするのかな、なんて考える。……というか、むしろ、

遥 この世界こそが、私の家族が生み出した演劇の、一つである。

遥 ……私は、それを否定したいよ。

遥 一度、この世界を、本当に演劇にしてみればいいんだと、思う。

遥は立ち上がり、舞台へ向かって歩いていく。

いつしか遥は眠っている。掃除ロボットが窓を閉める。炊事ロボットが机の上の皿を片づけていく。

遥は舞台へ上がる。演劇の遥を見つめる。

遥 私は、観客だった。でも、私はもう、観客を演じない。このゴーグルから見える景色に、家族の亡霊に、囚われていた。私は、この家族を、解体したい。たぶん、そういうことなのだろう。それは復讐と言うのとも少し違うのかもしれない。世界全部を、演劇にする。

溶暗。

第1章 VR演劇は世界劇場の夢を見るか？

舞台は、高校の空き教室。放課後。

田中遙、黒岩由紀夫、仏願愛、扇田恵理の四人が椅子に座っている。

遙 で、なんか、家族の演劇観てたら、もう訳わかんなくなって。家族が家族の演劇してて、その家族の役割がぐちゃぐちゃで、でもそもそも私家族いなかったから家族の役割ってなんだっけって思って、家族がたまに演じてた古い演劇ではさ、お母さんがご飯作ってお父さんは新聞ひらいてて、みたいな、そういうのがあったけど、じゃあ今何が普通なんだろうとかよく分かんなくなって、そもそも本当に私に家族なんていたのかな、とか、考えてたら、う、う、うおおおおお。

由紀夫 まあ、落ち着こう。

遙 うん。

恵理 その演劇を観たわけではないので、推測ですが、あえて役割を入れ替えることによって、家父長制的な家族観の問題を分かりやすく提示しようとか、そういう手法はこれまでもあったし、ありうると思います。

遙 なるほど。

愛 あ、あのー。

遙 ん。

愛 わたしはー、どうして呼ばれたんだろう、か。

由紀夫 それはね、みんな思ってる。

遙 えっと、

遙 独白。

遙 三人とは、演劇の授業で仲良くなりました。

黒岩由紀夫、学年で一番成績がいい。理系で、研究者になりたいらしい。芸術や哲学についての教養もある。いつ見ても本しか読んでない。

仏願愛、とにかく演技がうまい。母が有名な俳優で、中学生のころに歌手デビューもしている。歌も演技もうまい。

扇田恵理、とにかく演劇が好き。休みの日はハシゴして観てる。授業発表の作品にも的確な批評をしている。

遙 と、いうわけで。この四人で演劇を作ろうとかんがえました。

由紀夫 私の成績がいいのは何の関係が。

遙 あー、なんか、そもそも、なんだろう。世の中ってどうなってるのかなって、思ってる。いま、世界は、演劇を、人々を、取り巻く環境っていうのは、どうなってるのか。私ね、世界を変えようとしてるの。

由紀夫 なるほど、わからない。

遥 えー、つまり、科学技術。演劇と言っても、ロボット演劇とか、オンライン演劇

とか、AR演劇とか、あとシヨボいけどAI演劇とか、色々経てきました。これから新しい演劇を、誰よりも早く作っていきたいです。

恵理 急に興味湧いてきました。

由紀夫 つまり、私に研究者になって欲しいということか。平田オリザと石黒浩が出会ったように、ここで私と遥さんが出会うことで、新しいものが生まれていくと。

遥 飲み込みが早い！

恵理 なんかに興奮してきました！

愛 演劇のことは授業でしか知らないから、よくわからんよー。

由紀夫 おおむね分かってきた。が、愛さんにも伝わるように、どうぞ、この脚本の概要を解説。

遥 う、は、はい。

遥 立ち上がる。

遥 えー、まず、私の家族は演劇です。うちのローカルネットで、ずっと演劇をして

います。普通は、仮想空間に意識だけを残して死ぬ、なんてことは出来ません。

でも、どうやら演劇の力で成し遂げた、らしいです。それがなんなのかはよくわかりません。よくわからないから、ふと、嘘じゃなかったんです。アホな家族のせいで私はローカルネットにダイブすることも出来ないし、モニターの向こうの家族が実在しているのかどうかも分からない。でも、むしろ実は私も、そして世界も、家族の演劇が生み出した副産物なんじゃないかって、ふと思ったんです。現実世界の方が主役で、仮想世界の方が下位の存在だって思うじゃないですか。でも、違うのかもしれない。だって現実に、私は家族の演劇に取り憑かれてるんです。日常の色々なことが演劇に見えて、頭の中では、舞台の私と観客の私が入り混じって。まるで演劇が、この世界の主役のような気がして。……だから、それを否定しようと思いません。全世界を演劇にして、全人類を主役にする。で、みんなが私の家族の演劇を、観る。そしたら、うちの家族の演劇なんてちっぽけなもので、この世界が主役だってことが、はつきりするんじゃないかって。出発点としては、そういう、素朴で曖昧なものです。ちょっと由紀夫さん、こっちへ来てください。

由紀夫

は。

遥 由紀夫を引っ張る。

遥 全人類が演劇に触れるにはどうしたらいいと思いますか。

由紀夫 ……ふむ。まず、VR演劇を成立させることだろう。誰もがどこでも演劇を観られる状態にすることが必要不可欠だ。いま、技術的にはほとんど可能で、ただ、通信設備が追いついていない。我々が生まれる前にあった世界的な基地局破壊運動のせいだ。だからローカル7Gの区間内では仮想世界でコミュニケーションを

取ることが可能なのだが、演劇というのは、いま、まさに、演じているものを、届けなければならぬ。これにはどうしても、超高速超大容量超低遅延の無線通信技術が必要となる。

遙 ふむふむ。それはいつ頃に可能になるのでしょうか。

由紀夫 実はもうすぐ実用化される。そもそも6Gが上手く広がらなかっただけで、今我々が使っているのも7Gで、もうほとんど張り巡らされている。

遙 また壊されたりしないんでしょうか。

由紀夫 野蛮な前時代とは違い、監視システムが行き渡っている。大丈夫だ。

遙 な、なるほどお！ そりゃそうだ。

由紀夫 では。このへんで。

由紀夫、席につく。

恵理 あの。

遙 はい！

恵理 これってつまり、世界劇場、みたいなことなんですか。

愛 なにそれ。

恵理 シェイクスピアという大昔の劇作家の名台詞です。この世界は劇場で、人は男も女もみんな役者に他ならない、というものです。

愛 ん、みんな役者、は、やらないよね。

遙 あ、いや、でも、そういうことかも。

愛 そうなの？

遙 えっと、なんだろう。人が、みんな役者……これって、人々が演じるっていうことに重きを置いている考えだと思う。でも、私はむしろ、これを否定したいっていうことなの、かも。

由紀夫 そのころは。

遙 わ、わかんないよー。

愛 あの、いまだになぜ私が呼ばれたかは分からぬ……。

遙 はい、ごめんなさい、技術的に演劇の最先端を担っていく、でもそれを拡げて普及させていくには、スターがいなきゃいけないって思ってる。簡単に言うと、それになって欲しい。

愛 私の母が俳優だから？

遙 うーん、違う。なんか、愛さんは、間違ってたらごめんね、拘りがないのかなって思った。ものすごく才能があるのに、傲慢でもなくて、プライドがあるようにも思わない。自分の才能を、道具として使ってくれるんじゃないかと思った。

愛 えー、なんでそんなに見抜かれてるの？

遙 勘。うそ、むかしのインタビュー読んでたから、そこからの推測もある。

愛 なんかつまらぬこと言ったかも。でも、スターになるって……。

遙 えっと、で、スターになって、その技術をみんなが使えるようにしたい。

愛 ん……。えっと、ボーカロイドみたいなこと？

遥 はっ。

由紀夫 なるほど。

恵理 バーチャルアクタロイド、みたいなものですかね。

遥 それ、そういうこと。

由紀夫 いや、考えてなかったでしょう。

遥 ほひよ。

愛 私がバーチャルアクタロイドになるの？

遥 うん。

由紀夫 誰でもどこでも愛さんを俳優として、使えるようになる。

愛 うわー、すごい。夢みたい。えー。私、もっと生まれるのが早かったらボーカロ

イドになりたかったなーって思ってたの。

遥 そうなんだ。もう新しいのは出ないもんね。

愛 あの時代の、ボカロっていうツールがあったからこそ出てきた才能がいっぱいあ

って、そういうの凄いなって思うし、そのツールになりたいんよね。

恵理 私また興奮してきました。良い俳優と出会えてないだけですごく才能のある演出

家だっっていっぱいいるはずだし、そういう人が輝けるようになるかも……。

遥 そういうの、そういうの！ そうやって、誰もが演劇を作れるような世の中にし

ていきたいの。

由紀夫 段々イメージが共有できてきたね。

恵理 でも、ひとつだけ……。

遥 ん。

恵理 私は、

恵理、立ち上がり、距離を取る。舞台から降りようとしている。

恵理

私には特に出来ることはありません。

遥さんはまず生い立ちからして唯一無二で独自の視点を持っていますし、小さいころから演劇に触れてきたから演劇に対する嗅覚も凄くあります。だから、今回の発想もそうだし、これまでにない新しいものを作っていく才能があると思います。

由紀夫さんは研究者になれるだろうし、教養もあって、何より誰より研究において最も本質的なものと言える知的好奇心があって、ナカとソトの両方へのまなざしがあり、研究室にとどまらない世界に広がる技術を作っていける、そういう人だと思っています。

愛さんはお母さんの、上手い下手を超えたカリスマ性のある才能とは違って、実直に歌と演技の技術を磨き上げてきた、けれども器用貧乏にはとどまらない、その間に揺れ動いている、でもそれは他人が見出す勝手なドラマではなくて、愛さんの身体にドキュメンタリーとして宿っていて、きつと、どこかで物凄い才能として開花すると思っています。

遥 ありがとうございます、恵理さん。なら、

恵理

でも、だからこそ、私には、三人と違って、ただ演劇を観るのが好きっていう、それだけのことしかないから、何も出来ないです。私は舞台には上がれません。

遥

それは違う。

恵理

だって、私には才能は、

遥

それが才能だから。

恵理

え？

遥

そうやって私たちの良さをしっかり言葉にしてくれるのは、あなたしかない。私と愛さんは演劇を作っていくひと。由紀夫さんは演劇のプラットフォームを作っていくひと。じゃあ、誰がその価値を言葉にするの？ 誰がそれを広めていくの？ いくら良いものを作っても、勝手に広まっていくわけじゃない。その良さを人々に伝えて、それが受け入れられる環境をも作っていく必要がある。前時代の人が教育の場で演劇の生き残る道を切り開いてくれたからお金が回っているけど、でも、市民権は得てないよね。演劇雑誌は絶滅して、演劇の批評家ももう八〇歳以上の人がばかり。私たちが新しいことをして評価してくれる人なんて誰もいないの。あなたしかないの。誰よりも演劇を観ていて、そして、誰よりも演劇を愛しているのは。あなたがこの国で唯一の、一番の演劇ライターになる。

恵理

……。

遥

だから、こっちに戻ってきて。

恵理

それって、でも、なんか、私が遥さんたちと組まなくても、たぶんきつと、勝手にやることですよね。

遥

そうかも。でも、手を組んでくれることが大事。それは別に、忖度して良いこと言ってくれっていうことじゃなくて、もし、私たちが間違いそうになったら、止めて欲しい。

恵理

……わかりました。

遥

おおー！

恵理

そこまで言われたらやるしかないじゃないですか。

愛

わーい。

遥

では、これから、よろしくお願いします！

溶暗。

第2章 愛と仮想の戯れ

自然のなかに都市が飲み込まれていく風景。
そして、人々はさらにその中に飲み込まれていく。
四方向から声が聴こえてくる。

愛 ドラント様！

恵理 世界初のV A C T O R（ブイアクター）となられた仏顔愛さんに、
由紀夫 ただ台詞をなぞる機械ではなく、無限の0から1の生成を、
遥 演劇か、演劇でないか、それは問題ではない。

宇宙のまんなかに、地球が見えている。

舞台上に遥が現れる。演劇の地球をみつめている。

遥

えー、みなさま、本日はV R ミュージカル『愛と仮想の戯れ』にご来場いただき誠にありがとうございます。この公演は、バーチャル俳優ソフトV A C T O R 第一号M A N Aを主演とした世界初の演劇となります。ご覧の通り、すべてのお客様が自由に席を選んでいただくことができます。世界中のあらゆる場所から、この、もう一つの世界で、あなたが望む環境で、ワールドプレミアに立ち会っていただけます。それでは、ごゆっくりお楽しみください。

映像が消える。

遥

あれから私は高校卒業後、演劇の専門職大学へ入学して、劇作・演出を学びました。恵理さんは同じ大学のアートマネジメントコース。由紀夫さんは工学部へ行き、愛さんは気がつくど国営ミュージカルに出演していました。それぞれの道を進み、月日が流れ、世はV R 時代です。でも、V R 演劇では目の前に観客がいない、相互的な作用が生まれませんが課題でした。それを解消するための技術は由紀夫さんが研究し、私が協力しました。そういうふうに世界は動いています。……私の家族は、相変わらず、ずっと演劇をしているようです。たまにちらっと覗くだけで、もう観ることはありません。現実のほうが、ずっと面白いから。

愛が現れる。

遥

お久しぶり。

遥

おひさー。いや、こっちで会うのほんとうに久しぶり。
ねー。

由紀夫 仮想世界の中で、さらに下位の世界を生み、そこで演劇村を作っている。

愛 は？

遥 うん、まあ、それが普通の反応。

由紀夫 今やっているのが、「エンタメは演劇ではない」という漠然とした、けれども絶対不可侵のルールを敷いて独自の演劇を発展させる村を作っている。私以外の住人は全てAIだ。そろそろそちらへ戻る。

愛 つまり、どういうこと？

遥 まあ、研究熱心なことだよ、たぶん。

映像が消える。

愛 他の研究員の方は？

遥 たぶん奥でみんな寝てると思う。

愛 え？

遥 ほら、みんなあっちの世界にいるから……。

由紀夫、現れる。

由紀夫 お待たせ。

愛 おひさー。

由紀夫 もう親の七光りとは言われなくなったね。

愛 え、あ、うん。そっか。そんなときもあったね。

遥 確かに。

愛 いや、由紀夫さんのおかげでもあるので。ていうか三人のおかげなので。

由紀夫 これから仕上げ、ということ。

愛 うん。

遥 うわー、楽しみ。

由紀夫 では向こうで。

愛、由紀夫、退場。

遥 ……仮の、想。バーチャル。偽物。もう一つの、下位の、と、考える、私、や、この世界、は、本物？ 本物、現実、リアル。ナマ、今、ここ、あっち。演劇、は、どこ、に、ある？ なーんて。マナ、は、そこで、現実、になる、戯れ。これは、演劇か、どうか、なにか。

愛が現れる。愛は何もない空間を歩き回る。
愛の身体と若干ずれるように愛の輪郭がついてくる。
その輪郭は、だんだんと愛と一体化して、境界線が分からなくなっていく。
しばらくの間、自由に動き回っている。

遙 これ、どうなってるの？

由紀夫 愛さんの俳優としてのデータは既にインプットしている。それを愛さん本人とすり合わせていく作業、と言えはいいかな。

遙 なるほど。……ってことは、これ、本人がいなくても、簡易なものだったら作れるっていうこと？

由紀夫 そういうこと。

遙 うわー、すごいな。

由紀夫 念願のV A C T O R 第一号M A N A、楽しみだね。

遙 うん。

由紀夫 知名度も、申し分がない。

遙 申し分ないどころか。スターになってって言ったけど、大スターになった。

由紀夫 第一作は決めてるのか。

遙 決めてる。『愛と仮想の戯れ』

由紀夫 なるほど、それはおかしい。演劇じゃなくて今のこのことじゃないか。

遙 うん、ていうか、今のこれを見て思いついた。ピエール・ド・マリヴォー『愛と

偶然の戯れ』の翻案。

由紀夫 これは、偶然、だろうか。

遙 偶然か、必然か。

由紀夫 偶然を必然にしていくなだよ。

遙 そうだね。

愛 私はシルヴィア役ってこと？

遙 え？

由紀夫 これはA Iだよ。

遙 あー。うん、そうそう。たぶん。

愛 わーい。

遙 何がどうなってるの？

由紀夫 そろそろ戻ってくるよ。

愛、舞台へ戻る。映像のなかの愛は動いたままである。

遙 うん？

愛 つてことらしい。

由紀夫 成功だね。

遙 これがV A C T O R ってこと？

由紀夫 まあ、その準備が出来たということ。

遙 うおー。操作しにいきたい！

由紀夫 はい。

愛 私も見るー。

三人、退場。映像のなかの愛は動いたままである。

恵理が現れる。

恵理 舞台俳優として活躍する傍ら、バーチャル俳優V A C T O R 第一号『M A N A』の素材提供者となった仏顔愛さん。愛さんほど有名な俳優がV A C T O R として誰もが使えるようになる。これには世間も驚きました。

愛 驚くことじゃないですよ、私にとっては引き受けるのは当然のことでした。

恵理 それは以前からおっしゃっていた、自分の才能にこだわりがないということとも関連するのでしょうか。

愛 まあ、こだわりというか、誇りというか。そういうのがなくて。私が何十年と生きてきて積み上げたものだから、私だけのものだ、とか思っていないんです。私自身が道具だっと思ってるんだから、みんな使えるようになったらいいんです。こういう流れになるのは世の定めだと思ってますしね。

恵理 なるほど。ちなみに、いま、こうして私と話している愛さんは、本物ですか？

愛 さあ、どっちでしょう。

恵理 ありがとうございます。最後に、次回出演舞台についてお聞かせください。

愛 はい。『世界の創造がそれだけで仕事』です。この作品は、

溶暗。

第3章 世界の創造がそれだけで仕事

明かりが点く。

遙、由紀夫、愛が座って話している。

恵理が舞台の上を歩き、観客席をみつめる。

恵理

私は、今もそちらにいますのでしょか。もう、分からなくなりました。

私は、観る、書く、観る、書く、観る、書く。観る、観る、観る。幸いにも、私にはライバルが一人もいませんでした。幸いにも、時代は私を歓迎しました。世界中のあらゆる演劇を観ることが出来るようになって、私には観られないものではなくて、私は世界中の演劇を観てレポートを書く世界で唯一の演劇ライターになりました。誰もが私の文章を参考にしました。私に肯定的でない人も、それは、私のアンチであるということアイデンティティとしていました。私が、私の言葉が、それはまるで、ひとつの「現代演劇」という世界を作り上げている、と言っても過言ではありません。私はいま、どこにいますか。

恵理、座る。

遙

全員が舞台上に上がる必要があるんだよね。

恵理

え？

遙

え？

恵理

あ、いえ、なんでも。

遙

そっか。なんか、ある程度みんなが演劇に興味を持っている、という状態はできてきたと思っていて、次に必要なのはみんなが演劇を作りたいと思うこと。

由紀夫

ひとつだけ予定はある。戯曲を書くための執筆支援ソフトだ。もう作っている。でも、まだその段階じゃない、と思っていて。

愛

それは、どうして？

遙

やっぱり、演劇をするということと、戯曲を書くということの間には隔たりがあると思う。演劇を観る、舞台に立つ、舞台を作る。それらに対する興味関心はあっても、戯曲なんてそもそもほとんど読みもしないわけで。うーん、国語の教科書に載ってこなかったから……。

恵理

それはそう思います。愛さんに続いて、V A C T O R も増えましたし、昔のボカロ現象のように、沢山埋もれていた演出家が出てきました。でも、根本的に作る人口が増えたとは思いません。

遙

恵理さんのおかげで観客人口は増えたと思うし、お金が回りやすくなったから続けられる人が増えたとも思う。でも、そうじゃなくて、もっと。

愛

ふれい、とうー、あーん……。

遙

お。

愛

なんか、みんながみんな、演劇に捧げたいわけじゃないから、なー、と。

遙

お、お。

由紀夫 趣味としてのハードルを下げる、か。

遥 うおおおお。

愛 遊べば、お金が入る。ふれい、とうー、あーん。大ヒットゲーム、間違いなし。

遥 うおおおおおお。

由紀夫 まだARが主流だったころ、技術的に完全な仮想空間、つまりメタバース、死語だけれども、これが出来なかったころ、概念として現実を拡張するという意味でのメタバースを志向して、その手のゲームが流行っていたね。

恵理 あれですね、モンスターを捕まえるやつとか、歩いて稼ぐやつとか。

愛 あった、あった。演劇でも応用されてたよね。

恵理 そんなのあったんだ。

恵理

STEPNというスマートフォンを持って歩いて稼ぐゲームがありました。その以前に太田省吾という劇作家・演出家がいんですけど、舞台上でものすごくゆっくり歩くんですね。これを組み合わせ、STEPNをしながら太田省吾の代表作『水の駅』を上演したりする、劇団歩行速度っていうのがありました。へー。

愛

由紀夫 私もそんなのは知らない……。

遥 もしかしたら家族がやっていたかもしれない。

愛 それみたいに、演劇したら稼げる、みたいなことでいいのかな。

由紀夫

演劇をしたら稼げる、というのはあくまで拡張機能の方がいいかもしれない。メインとしては演劇の作り手を育成するゲームで、そこから拡張して、演劇をしたり、戯曲を書いたり、そういったことでゲーム内の独自通貨がもらえていく。こういう仕組みでどうだろう。

遥

いいと思う！ 恵理さんの知識も活かそうだし、由紀夫さんのAI演劇村かなんかのデータも活かせるんじゃないかな！

由紀夫

もちろん。
あ、知識っていうか……そうですね、お金が稼げるというだけでなく、すでに演劇を作っているひとたちや、過去の作品の権利継承者に使用料が回るようにしたいです。

遥 そうか、それは、すごい。

恵理

はい。今の私の力なら……って言うとか何かこう、恥ずかしいですが、たぶん許諾も取っていけると思います。ゲームの中で、作品を閲覧したり、主人公が学んだりすることによって、その回数に応じて使用料が入っていくといいと思っっています。これでゲームが全世界に広まれば、かなり大きく演劇にお金が回っていくのではないのでしょうか。

由紀夫

エコシステム面はかなりしっかりと組む必要があると思う。アイテムの購入や、手数料の設定、あるいは独自通貨自体を観劇で使えるようにしていくということも一つの手かもしれない。

愛 わー、なんかもう、ややこしくして、なんも言えない。

遥 そもそも愛さんの案じゃん。

愛 そ、そっか。

由紀夫 この先に戯曲執筆支援ソフトも普及させていこう。
遙 わー。まずはゲームのストーリー組んでいかなきゃだね！

恵理、立ち上がる。三人は退場する。

恵理 ご覧いただいている皆さま、ありがとうございます。演劇ライターの扇田恵理です。演劇育成ゲーム「エンゲキ科！」やっと皆さまにお披露目することができま
す。このゲームでは、プレイヤーが好きなように演劇の勉強をさせていくことで、
主人公はオリジナルの演劇を作っていきます。実際の流れを見て行きましょう。
今回は設定を2005年に行っています。ちょうど『三月の5日間』が岸田國士戯
曲賞を取った直後の話ですね。高校一年生からです。

演劇部の部室。部長が現れる。

部長 おっ、君が新入部員の……。

名前の入力欄が表示される。

恵理 私の名前を入れますね。ここは自由に設定できます。

扇田 恵理と入力される。

部長 恵理さんか。劇作・演出希望だったと聞いている。どんなジャンルの演劇が好
きなんだ？

恵理 主にミュージカル、狂言、旧語演劇、サイトスペシフィック演劇など、でもな
んでも好きです。設定した時代がない演劇をしても処理してくれますよ。

部長 なるほど、面白いな。もう一つ聞きたいんだが、好きな学問や興味のある仕事
はあるか？

恵理 この部分は、パーソナルコードから自動的に抽出されますので、そこからチェッ
クを外したり、項目を追加したりしてください。演劇学、芸術批評、に絞ってみ
ますね。この内容によって、部長から戯曲や映像、演劇論の本をオススメされて
渡されます。これはメニューの資料欄に日々更新されるので、確認してください
ね。

部長 なら、これを見ておくといい。

恵理 今回部長から貰った資料は、北海道伊達緑丘高等学校演劇部、第49回全国高等学校演劇大会参加作品『りんごの木』の映像、戯曲は平田オリザ『カガクするコロロ』、演劇論の本である真壁茂夫『架空の花』でした。ここが肝心なところですね。ゲームの主人公だけではなく、プレイヤーのみなさんも演劇の資料を楽しんでいただけます。また、このゲームでは、思考加速システムも採用していますので、千倍の速度で資料を閲覧することが可能になります。安全上の問題から、一日の使用時間は法律で制限されていますが、自動的にロックがかかりますのでご安心ください。

部長 それじゃあ遅くなったが、演劇部のルールを説明するぞ。まず、俺たちは夏にある地区大会で勝つことを目指している。地区大会、県大会、ブロック大会、全国大会とある。他の高校よりも面白いものを作るために勉強しなきゃならない。勉強と言っても、演劇の勉強だけじゃない。日々の学校の授業にどうやって取り組むかも大事だぞ。恵理さんの学んだこと、出会う人、すべてが自分の血肉となり、演劇になっていくんだ。

恵理 単純なゲームではありません。ゲームのなかのあなたが、ひとりの人間として成長していき、世界でたった一人のアーティストとして育っていくのです。

部長 じゃあ、基礎練習を始めるぞー。

部員たちが筋トレや表情トレーニングをしている。

恵理 このゲームには、人類史上もっとも膨大な、演劇の知がつまっています。過去、現在のあらゆる演劇資料を、それは商業ベースのものや都心部の小劇場演劇だけではなく、学生の演劇から大衆演劇、市民劇団の公演資料まで、可能な限りのデータを集め、アーカイブを作り上げました。ゲームをより楽しんだり、有利に進めたりするためには追加投資が必要になります。こうしたお金のほとんどは演劇資料の著作者等に還元されます。

「演劇を楽しみ、演劇を支援し、演劇を創る」
これがこのゲームのコンセプトです。そしてプレイヤーである、あなたが創った世界にたった一つの演劇には、NFT、つまり非代替性トークンとして価値がつきます。唯一無二のデジタルアートとして、高い価値が付くこともあります。このゲームが盛り上がっていけばいくほど、その価値は多様なものになっていくでしょう。今後の拡張機能として、PLAY TO EARNを予定しています。独自通貨を発行し、ゲーム内通貨として、あるいは他で使える電子マネーとしての展開も予定されています。やがては、「誰もが演劇で稼ぐ」世界へ。

溶暗。

第4章 戯曲のことば

舞台には無数の劇作家がいる。

舞台には、無数の劇作家がいる。

人びとは、誰に向けるでもなく、言葉を綴る。

劇作家 最近では、戯曲を書くっていうことも、珍しいことじゃなくなりましたね。戯曲

執筆支援ソフト「ワードエンゲキカー」が普及して、

劇作家 通称ワーゲキと言って、ちょっとしたアイデアも、戯曲を書くのに役立ててくれ

て、最初はスランプに陥った劇作家だけが使っていたみたいなんですけど、

劇作家 劇作家が戯曲を書けば書くほど機能が向上して、それで、あと、なんか書けば書

くほど儲かるらしくて、ってことで、みんな始めて、

劇作家 そうやって書かれた戯曲は、だいたい「劇作家になろう」ってサイトに投稿されたりして、

劇作家 書くだけでも通貨がもらえるのに、上演してもらったら上演料も入ってきて、

劇作家 なんか、それも、人間だけじゃなくて、仮想演劇村みたいなどころでの上演もあって、何が何だかわからないけど、まあ、いいか、って、

劇作家 みんなが戯曲書くから劇作家の仕事がなくなるのかって、思ったけど、別にそんなこともなくて、

劇作家 いつしか国語の教科書には戯曲が沢山載っていて、

劇作家 論考も対話篇で書くのが当たり前になっていて、

劇作家 いつからか、人びとが普段使う言葉が、

劇作家 使う言葉を、戯曲に書くのではなく、

劇作家 戯曲を書くために考える言葉こそが、

劇作家 人びとの使う言葉になっていった。

溶暗。

第5章 演劇という名の万物

舞台には、遙、由紀夫、愛、恵理がいる。

恵理

私が書く言葉は、いま、何を批評しているのでしょか。

恵理

世界は、演劇で満たされている。ゲームの中では演劇を戦わせたり、演劇と演劇の子どもが生まれたり、演劇のクローンが生まれたり、V A C T O R ・ M A N A 初舞台にはN F Tとして国家予算十年分の価値がついていて、すべての演劇的想像は何かを創造している。あらゆる人が演劇を観て、あらゆる人が演劇を知っている。自分の人生を演劇として残すライフシステム、これはもう当たり前。演劇を観た感覚を得るアロマであったり、演劇を栽培したり、自分の考えた演劇をなにか別のものに物質化するプリンターもある。現実世界の現代演劇が、仮想世界にダイブして、仮想世界の現代演劇と会ったらしい。言葉は演劇のためにある。ワーゲキを通した戯曲を書くという行為は、巨大なクラウドの中で言葉自体を支配していった。そういったひとつひとつが、何をもたらしているのか、もはや私にはわからない。世界は演劇になっている。いつからか、なっていた。けれども、これは演劇なのだろうか。

遙さん、あなたが見たかったのは、こういう世界ですか。

遙

私が見たいのは、この先の世界だよ。

恵理

私は、私は、それに、反対、します。

遙

どうして。

恵理

だって、それは先ではなかったはずですよ。遙さんの家族の演劇は、ちっぽけなもののだから、ちっぽけだと証明するものでしか、なかったはずですよ。今となってはこの世界では、何が起るかわかりません。この物語には先があります。それは、止めるべきものです。私は、そのために、ここにいます。遙さんの家族は、ブラックボックスなんです。

遙

いや、でも。

由紀夫

私は、進めるべきだと思う。演劇とは何か、無限に0を1にしていく生成の作用だと考える。1が1であると、言うものではない。それはつまり、俳優は戯曲の内容を記号として話すものではなく、そこにある身体的現象が、観客の反応とも相互作用し、つねに0と1の間に揺れ動くものである、そういった演劇論とも重なるものだ。それを無限に反復しながら、永遠の生成を繰り返していく、これは、世界が世界を肯定するということであると、私は考えている。ニーチェは、この世界に一回性のもなどなく、すべてが同じように繰り返されている、永遠回帰という概念を提唱した。ここでは、そのような世界であっても今を肯定できることの重要さが語られる。しかし、どうだろう。私たちは世界をそのようには捉えられない。けれども、この思想は(いま、ここ)の芸術である演劇と結びつくと思うのだ。無限に演劇を反復している、唯一の人間が、遙さんの、家族だ。

恵理 由紀夫さんの言っていることは分かります。でも、机上の空論だと、思います。

由紀夫 私も、そう思う。だからこそ、その世界を見てみたい。

恵理 危険を、伴っても。

由紀夫 例え世界が減びようとも。

恵理 それって、なんか。それって、芸術的成果のためならば人の痛みを伴ってもいいっていう、前時代的な演劇と、考えが同じじゃないですか。私たちは別に、人のためにと、やってきたわけじゃないです。でもそれは、どこかで人のことを考えて、線を引くべきものではないですか。

由紀夫 私は、それとは、少し違うのだと思う。マッドサイエンティストと呼ぶべきものなのだろう。既存の概念が覆っていく、それを見ることにしか、喜びを感じていない、だから、私は、この先を見ることに、賛成する。

恵理 そう、ですか。

愛 私は……。

恵理 はい。

愛 世界が大きく動けば、その歯車を動かしていったのは、その一人は間違いなく私で、そのことが、私は嬉しいと、思う。

恵理 はい。

愛 私は演劇が好きなわけでもない。自分が好きなのでもない。演じることが好きなわけでもない。そして、人間が好きなのでもない。だとすれば、私は何に幸せを感じるだろう、と、ずっと考えてきた。もしかしたら、それはたった一人の伴侶だったのかもしれない。でも、あるとき遙さんに出会えて、ひとつの、世界の歯車として動く役目ももらってから、私は、それが生きがいです。

恵理 はい……。

愛 だから、遙さんが、やりたいことを、やってもらいたいです。

恵理 そう、ですよね……。

遥 ありがとう、二人とも。

恵理 遙さんは、例え世界が減ぶとしても、やりたいですか。

遥 なんか、私はそうは考えてなくて。もし減ぶしたら、それは最初から世界が偽物だったっていうことだと思っただけ。だから、減ばないと思っただけ。ていうか、なんか、
はい。

恵理

たぶん、ただ単に、かわいいそうなんだと思う。今となっては。家族の演劇は、そもそも演劇なのか、つてことがあって。演劇ってなんだって。さつき由紀夫が言ったみたいにさ、そうなのだとしたら、私しかモニタリングしていなくて、絶対に相互作用がなくて、ただ閉鎖的な空間で、全員が演者として、永遠に上演されている演劇って、それは、演劇なのか。演劇じゃなかったら、家族はなんのためにあそこにいるのか。観客が必要なんじゃないかって。見る、見られるという関係が、成立したときに、家族はちゃんと報われるんじゃないかって。思

恵理

はい。

遥 だから、私は、うん。ごめん。

惠理 ごめんなさい。

遥 惠理さんが、謝ることない。

惠理 いえ、なんていうか。私は、ここで、遥さんを止めるために、なにかを批評してきたんじゃないかって、思っていました。でも、いま、私はその言葉を持っていません。そのことが、なんか、悔しくて、不甲斐なくて、私は、いつのまにか、観客じゃなくて演者になっていたんだなって思って、外にいられなかったことが、悔しいです。ごめんなさい。

遥 こちらこそ、ごめんなさい。

惠理 私は、賛成できません。だから、ここで、降ります。

遥 今まで、ありがとう。

愛 ありがとうね。

由紀夫 感謝する。

惠理 はい、ありがとうございました。

惠理、舞台から降りる。観客席を駆け抜けていく。

惠理は、三人をみつめている。

三人は、向こう側の惠理をみつめている。

遥 私は、いま、なにをみつめているのだろう。想像が、演劇化する世界。これは、

愛 いったいどこへ向かうのだろう。分からない、けれど、

遥 どこからか吹いた風に、演劇のにおいがした。

由紀夫 演劇というのは、実は、生き物だったんじゃないか、なんてことを、考えた。

由紀夫 演劇という名の万物は、流転していく。

映像が消える。三人は、お互いを見合わせる。

由紀夫 では、ワーゲキにおいて構築されていたネットワークに、遥さんの家のネットワークを直結する。これで、地球にいる全人類が、遥さんの家族の演劇を、同じ時間、観る。それは世界の終わりかもしれないし、世界の始まりかもしれない。では。

遥 お願いします。

溶暗。

プロローグ 反復かつ永遠

舞台下手に勉強机が二つあり、子ども部屋をあらわしている。母が机の上にプリント広げているが、その上でゲームをしている。父は読書をしている。舞台中央に食卓がある。舞台上手にはキッチンがあり、兄がエプロンをして料理を作っている。キッチンの方から姉が子ども部屋へ向かう。

姉 おい、宿題はやったのか。

母 うるせー、今からやるっての。

父 お兄ちゃんはいつもそう。どうせやらないでしょ。

母 今からやるって言ってるだろ。

兄 もうすぐご飯できるわよ。

母 おっ、じゃあ後かな。

父 いまいく。お兄ちゃんまたそうやって後回しにする。

母 ちっ、うぜー。

姉と父は食卓へ向かう。母は少しゲームを触ってから、イライラした様子で食卓へ向かう。四人の家族が食卓にそろろう。

四人 いただきます。

食卓には何もない。何もないものを食べている。

演劇の中に、想像が投げ込まれていく。

最初は食べもの、その次は鉄やプラスチック、人間、地球。

世界の全てが食べられているようで、

それはまさに世界が食べられているということであった。

この光景がホール全体に映し出され、埋め尽くし、繰り返していく。

大きなブザー音が鳴り、暗闇となる。

しばらくの暗闇が続き、ゆっくりと客電がつく。

舞台には何もない。

了

【参考文献】

書籍

- 井澤賢隆（1998）『学問と悲劇——「ニーチェ」から「絶対演劇」へ』情況出版
ウィリアム・シェイクスピア著、福田恆存訳（1981）『お気に召すまま』新潮社
エリカ・フィッシャー・リヒテ著、山下純照・石田雄一・高橋慎也・新沼智之訳『演劇学へのいざない 研究の基礎』（2013）国書刊行会
円城塔（2018）『文字渦』新潮社
太田省吾（1993）『舞台の水』五柳書院
岡嶋裕史（2020）『5G 大容量・低遅延・多接続のしくみ』講談社
川添愛（2020）『ヒトの言葉 機械の言葉 「人工知能と話す」以前の言語学』KADOKAWA
神林長平（2011）『言壺』早川書房
ジル・ドゥルーズ著、江川隆男役（2008）『ニーチェと哲学』河出書房新社
ニーチェ著、氷上英廣訳（1967）『ツアラトウストラはこう言った（上）』岩波書店
ニーチェ著、氷上英廣訳（1970）『ツアラトウストラはこう言った（下）』岩波書店
ニーチェ著、秋山英夫訳（1966）『悲劇の誕生』岩波書店
ハイナー・ミュラー著、岩淵達治・谷川道子訳（1992）『ハムレットマシーン——シェイクスピア・ファクトリー「ハイナー・ミュラー・テキスト集1」』未来社
平田オリザ（2004）『演劇のことば』岩波書店
森岡正博（2020）『生まれてこないほうが良かったのか？ — 生命の哲学へ！』筑摩書房

論文

鹿野祐嗣（2013）「未来の演劇と新しい哲学」『演劇映像学』73—83頁。

Webサイト

- オリコン株式会社、徳重龍徳『神田沙也加、“自分”に執着しない生き方「社会の歯車になりたかった」芸能界引退悩んだ時期も』
<https://www.oricon.co.jp/news/2196285/full/>（参照 2022- 06- 11）
株式会社NTTドコモ『ホワイトペーパー 5Gの高度化と6G 4.0版』
https://www.docomo.ne.jp/binary/pdf/corporate/technology/whitepaper_6g/DOCOMO_6G_White_PaperJP_20211108.pdf（参照 2022- 06- 22）